

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設番号	66-1113
施設名	しらさぎ保育園
施設所在地	板橋区成増5-19-40
法人名	社会福祉法人 興善会

1. 活動のテーマ

<テーマ>

身近な素材や画材との遊び～遊びを通して知る表現活動～

<テーマの設定理由>

子どもたちが表現したい物や事象をイメージに合わせて自由に表現する力を養っていくためには、素材との多くの関わりが必要である。素材への興味だけで終わらず、自らの思いの表現が身近な素材等を通して発揮できるようにしていく。

2. 活動スケジュール

月に2回、通年を通して造形活動（アトリエ活動）の講師を招き、子どもたちの育ちに合わせた素材の選定、及び保育活動を実践する。また、継続的に子どもたちが遊びに取り入れられるように日常的に保育室内に素材・画材を配置していく。

各月の前半のアトリエ活動→素材を用いた微細運動活動

各月の後半のアトリエ活動→素材を用いたダイナミックな活動

月の中で両面の活動を設定していく。

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

・布（質感、色、大きさに工夫） ・クラフト紙 ・カップ
・画用紙 ・絵の具 ・袋（大きさ、色、形に工夫） ・寒天
・粘土（油、土） ・クレパス ・模造紙 ・ステープラー
・釘 ・金槌 ・木片 ・板 ・業務用ラップシート など

4. 探究活動の実践

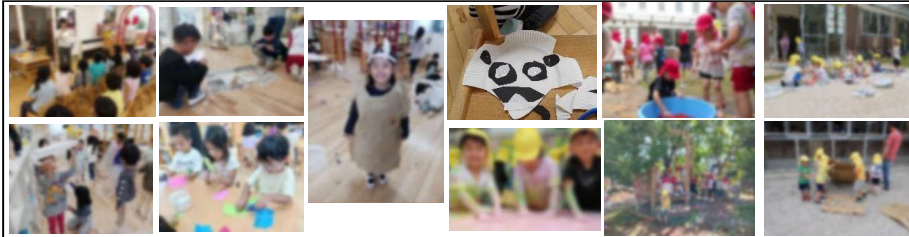
<活動の内容>

子どもたちの興味関心に合わせて、天候などを考慮しながら素材の選定を行い、通年を通して実践した。造形活動において講師を交えながら、子どもたちの興味と気づき、保育展開について保育者も学びを深めている。行った活動の一例で「絵の具遊び」が挙げられる。絵の具のスタートとして、室内で紙に描くものとしてスタートするのではなく、まずは絵の具がどんな感触で、どんな特性があるのかを感じられるよう戸外で開放的に行った。

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

戸外での絵の具活動では、絵の具の感触に興味を持つ子、テーブルごとに異色をおいたことから、子どもたちが移動することで、少しずつ混色が起こり、出来上がっていく色の変化に興味を持つ子の姿が見られた。感触が心地良いと感じた子は指先から徐々に腕や足、顔へと広がり、自分の手形をキャンバスとして用意したロール紙につけたり、友だちの背中などの服に付けて楽しむ子がいた。また、大型パレットで混色を楽しむうち、パレット上で描けることに気付き、描画を楽しむ子もいた。混色に興味を持つ子は、次々にパレットを移動し、色の変化を楽しんだり、保育者へやってみたい色を依頼する声も聞かれた。

通年に渡り保育者は、それぞれが何に興味を持ち、どんな気付き、発見を楽しんでいるかを把握し、継続的且つ子どもたちが発展的に楽しめるよう、素材及び環境構成を工夫していった。



5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

アトリエ活動において、講師から道具の扱い方を聞いたり、素材の提供をしてもらうことで、子どもたちの遊びの広がりが見られた。アトリエ活動の内容については、講師と担任が子どもたちの様子を共有してから素材の選定をしたり、気候を見ながら展開されることが必要である。保育者の都合によって保育活動が制限されてしまうことがないよう、事前の準備や環境構成の大切さを改めて感じるが多かった。

保育者主体の『行事に合わせた造形活動』ではなく、目の前にいる子どもたちの姿や興味、天候等に合わせて保育活動を行うことで、自らが遊びを深めたり、年齢に応じて協同的な活動が自然と生まれることに気付いた。

また定期的に行われることによって、講師と共に子どもたちの姿をより深く観察する機会となるため、一人ひとりの発見や気付きにも、保育者が気付くことができたように思う。講師らと振り返りの時間を設ける中で、環境の一部である保育者の関り方が活動を左右させてしまうことにも気付いた。日々の保育の中でも、子どもたち自らが発見していく喜びや共感から生まれる遊びの展開を見逃さないようにしていきたい。

通年を通して行われる身近な素材や画材との遊びが継続的に行われることで、子どもたちの経験が積み重なり、豊かな表現活動へと繋がるため、園の文化として今後も図っていきたい。また、保育室だけでなく、園庭や自然環境とも融合させることで、遊びの広がり、素材を使った開放的な表現活動が展開されることが見えてきた。園庭と保育室の流動的な活動により、子どもたちの遊びの広がりが展開できるよう努めていく。

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設番号	66-1113
施設名	しらさぎ保育園
施設所在地	板橋区成増5-19-40
法人名	社会福祉法人 興善会

1. 活動のテーマ

<テーマ>

身近な音やリズムに親しむ

<テーマの設定理由>

乳児から楽しめる"音"に焦点を当て、それぞれの発達に合わせた音楽との親しみ方に広げ、自らが生み出す音楽表現へとつなげていくため。

2. 活動スケジュール

- ・年間を通して身近な音（雨や風などの自然や声、歌、楽器から奏でるメロディ）に親しんでいく。
- ・9月から11月にかけて重点的に自然物や廃材を使い、手造り楽器を作成する。
- ・本物の演奏(ミニコンサート)を見聞き及び体験し、音に親しむ楽しさ、関心を深める。
- ・経験したことを生活の中で継続的に行えるように環境を整えていく。
- ・音楽やリズムに合わせて心地よい体の動かし方、表現方法を体験する(みんなでおどろう)。

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

- ・日常の保育では、サークルタイム時に音に触れる機会を設けている。
- ・身近な楽器（タンバリン、すず、トライアングル、カスタネットなど）に親しむことの出来るよう保育室の棚等手に触れる空間に配置する。
- ・散歩時に自然物を収集し、廃材や様々な素材を用いて楽器作り（音が鳴る素材）ができるよう保育環境を整える。
- ・プロの演奏家と打ち合わせし、子どもたちが慣れ親しんでいる曲などを演奏してもらう。（感化を受ける）
- ・様々な音で身体表現ができるよう保育室にスペースを用意する。

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

保育園内には園庭、室内等様々な音にあふれている。自然と見聞きする音に子どもたちが主体的に関われるよう、自然物楽器、廃材楽器、タンバリン等で遊びこめるゾーニングをする。

・上記の年間を通して行う活動の中で、深い遊びになってくる11月下旬にプロの演奏家を招いて『ミニコンサート』を開催する。子どもたちが慣れ親しんでいる音や曲を演奏してもらう中で、子どもたちが感じた音（音楽）を歌ったり、踊ったり、体を揺らしながら楽しむ。また、5歳児は演奏終了後、実際の専門的な楽器を奏する体験をする。

また音楽に合わせて身体を動かすことに興味を持ち始めたところで、『みんなでおどろう』を開催し、リズムに合わせて様々な身体の動かし方を体験する。

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

日常の中で様々な音に興味を持つ子どもたち。聞きなれた担任の声に反応を示す乳児の姿や、雨や風などの音の他、緊急車両などのサイレンなどにもすぐに反応を示し、乳児のうちから表情で何かを訴える姿が見られていた。保育者は表情や何語から読み取り言葉にする応答的な関わりを繰り返していた。子どもたちにとって、「音」がとても身近なものと言える。

- ・0歳児から、戸外活動で木の実や小石を収集する子どもたちの姿が見られ、集められるような箱やペットボトル、袋などを準備したところ、指先や手をしっかりと使い、容器に入れようとする子どもの姿が見られた。収集する際に容器に落ちる音や、振った際に出る音に興味を持っていたため、保育者と共に手造り楽器遊びを行った。

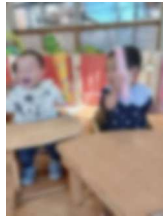
- ・幼児は廃材を使いながら、入れる物や容器によって奏でられる音の違いに興味を示し、協同的に遊びを展開する姿が見られた。また、年長児から下級児に対して自然物と廃材を掛け合わせて作った手作り楽器をプレゼントする姿も見られ、異年齢児の交流が生まれていた。

また、保育室内に木琴を玩具として配置したところ、叩くところによって音の高さに違いがあることに気付く年長児の姿が見られた。はじめは叩くことで奏でられる音に興味を示していたが、徐々に慣れ親しんだ曲を奏でる姿が見られるようになってきた。

- ・ミニコンサートでは、音楽を全身を使って楽しむ姿が見られた。クラス毎に集まって参加していたが、気持ちが高まってきて、自らがステージに立って踊ったり、歌ったりする姿が見られた。子どもたちの様子に合わせてマイクを渡したところ、マイクを手にもって歌をより一層楽しむ子の姿が見られた。その楽しい雰囲気を感じ、0歳児の児も様々な楽器や年長児の元へ駆け寄り、関心を示す姿が見られた。

年長児の演奏体験では、普段触れたことがないような楽器を演奏家から教えてもらい、奏でる楽しさを味わっていた。ミニコンサート後は楽器を手作りしてみたりと、幅広く表現活動を楽しんでいた。

- ・年度末に行った3歳児以上を対象に行ったリズムあそび（みんなでおどろう）では、園で聞き慣れているような音楽に合わせて身体を動かしたり、様々なテンポ、曲調に合わせて身体を揺らしたり、動かしたりする遊びを行った。講師の言葉掛けや動きに興味を持ち、見よう見まねで参加しながらも、表現を楽しんでいた。



5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

音は子どもたちにとって身近なものであり、子どもたちの周りには様々な音で溢れている。経験を重ねるうちに何の音なのかイメージと結びつくようになってきたり、感触と音が結びつくようになる過程が見えてきた。乳児でも、自然物遊びや素材遊びの中で、偶然生まれた物音に興味を持ち、音を出す楽しさを感じるようになることが分かった。既製楽器だけでなく、遊びの中から生まれる音を大事にし、日常的に楽しめるよう、廃材などとの掛け合わせが子どもたちの興味関心をより引き出せると思った。

また、音には高低差があることにも気付き、幼児は様々な廃材を用いて楽器作りをしたり、友だちと奏でて遊ぶ協同的な遊びが展開されることが見えてきた。子どもたちはタンバリンやカスタネットなどの一定音だけでなく、ピアノなどから奏でられるメロディにも興味を示す姿が見られ、聴く楽しさと奏でる楽しさがあることに気付いた。サークルタイムで歌を歌ったり、曲に合わせてダンスしたりと、その行為自体に意識がいてしまいがちであったが、「音」を楽しむという原点を忘れずに保育していくことで、様々な遊びが展開されていくのだと思う。

今回は子どもたちの日常的に楽しんできた音あそびから、プロの演奏家によるミニコンサートを実施し、子どもたちの興味をより深められたのではないかと思う。また、リズムあそび（みんなでおどろう）では、テンポの違いを身体表現を通して感じ、音の楽しみ方を広く捉えるきっかけになった。

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設番号	66-1113
施設名	しらさぎ保育園
施設所在地	板橋区成増5-19-40
法人名	社会福祉法人 興善会

1. 活動のテーマ

<テーマ>

身近な環境と運動遊具を使った遊び（ストライダー）

<テーマの設定理由>

園庭環境を十分に生かし、運動遊具を取り入れ、遊びの広がりを持つ。
遊びの難しさや楽しさを感じながら、繰り返し行うことで成功への探求へと結びついていくと感じたため。

2. 活動スケジュール

通年を通して、園庭にストライダー及び自転車があり、幼児期頃より憧れや思いが強く
なっていく傾向にある。
○5月 「ストライダー体験」を実施（講師によるパフォーマンスと乗り方指導）
○ストライダー体験以降
園庭に常設し、子どもが自ら主体的且つ協調的に取り組んでいく

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

（活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具）
・ストライダー ・車輪止め ・ヘルメット ・自転車
・ラインカー ・ガイヤフィールド ・築山
※衝突防止のため、回遊できるようグラウンドにラインカーでトラックを引き、走行を一方
向に限定する。

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

通年を通して、園庭にストライダー及び自転車があり、幼児期頃より憧れや思いが強く
なっていく傾向にある事が前提にあるため、5月に外部講師による交通安全の啓発も兼ねて、
ストライダー（自転車）体験を行う。
・講師によるパフォーマンスは全園児対象に行うが、乗車については3歳児以上を対象に実
施。
・転倒や衝突防止の為、ヘルメットを必ず着用してから実施する。ストライダーにまたが
り、まずは足を着地させ、身体を支えられるかを確認する。脚の力でストライダーを前進さ
せると共に、止まり方をまずは伝えていく。クラスごとに実施し、子どもの様子を見ながら
援助していく。また、ストライダーを十分に扱えている児に対しては、自転車に乗車でき
るよう身近な環境（園庭）に常設しておく。

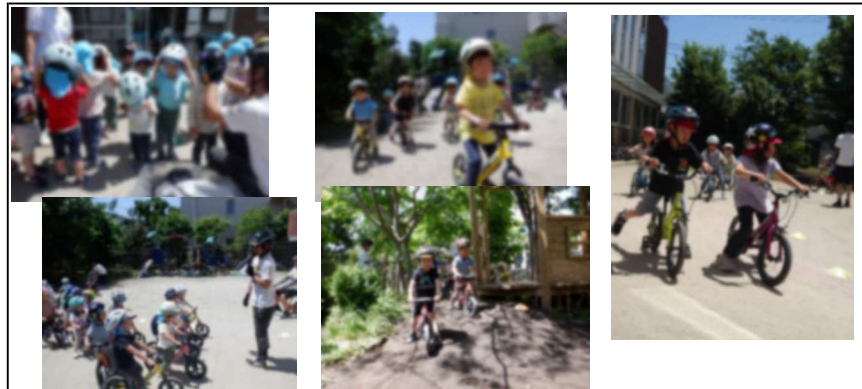
<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

(活動の内容、活動中見られた子どもの姿、保育者との関わり等)

3歳児以上を対象にストライダーの乗車を行っている為、2歳児から進級した児はストライダーへの憧れを持っている様子が、意欲的に参加していた。家庭で乗り慣れている児はスムーズにストライダーを操っているが、経験がないであろう児は、サドルに着座しながら”乗る”という行為自体に戸惑う姿が見られた。中には、うまく乗りこなす友人に対し「すごいね」「〇〇くん上手」と声をかける姿が見られる。

また、園庭にストライダーの他、段階を踏んで楽しめるよう自転車も準備しておく。ストライダー体験当日は、5歳児は自転車を主として活用する。はじめはうまく乗れないものの、「やめたい」などの消極的な声は聞かれず、主体的に転んでも何度もチャレンジする姿が多く見られた。身近な環境(園庭)に常設することで、継続的に自転車練習に励んだり、友だち同士で応援し合う姿が見られた。

園庭でのストライダーや自転車の練習に積極的に取り組む姿が見られた。徐々に脚を離し、スムーズに乗れるようになると自身で成長を感じることができ、「先生見て」や乗れるようになったことを嬉しそうに報告する子どもの姿が見られた。



5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

園庭の環境が芝生や植栽があるエリアとグラウンドに大きく分けられおり、子どもたちにとって、ストライダーや自転車乗車に適した場所が分かりやすいことが、日常の保育の中で子どもたちが選択的に運動遊具を取り入れらると感じる。

また身近な環境も一人ひとりの興味関心によって、自然な遊具と横断的な遊びが展開され、それぞれの遊びの発見(主体的かつ選択的)に繋がっていき、日々の遊びが豊かになることが分かった。

保育の中で、苦手なことやできないことがあるとすぐに諦めてしまったり、そのことを避けようとする姿も多く見られるが、ストライダーに関しては出来るようになるまで積極的に取り組む姿が多く見られる。はじめは出来なくても、少しずつ自身で成長を感じられることがレジリエンスも含めた豊かな人間性へと繋がっているように思う。

このように、子どもたちが自身の成長を感じ取りやすい遊びや活動が、自信へとつながり、様々な活動へ意欲的に臨めるのではないかと感じられる。

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設番号	66-1113
施設名	しらさぎ保育園
施設所在地	板橋区成増5-19-40
法人名	社会福祉法人 興善会

1. 活動のテーマ

<テーマ>

身近な生き物

<テーマの設定理由>

身近な生き物を観察したり、触れたりすることで、生き物への興味を深めていたため、様々な環境で暮らす生き物への関心を広げていく。

2. 活動スケジュール

・通年

園庭(ビオトープ周辺領域)や戸外活動で虫などの生き物や水の中の生き物をたくさん観察したり触れたりしながら、図鑑などを用いて様々な環境に暮らす生き物を知り、探究していく。

・6月

移動動物園でウサギやモルモット、ヒヨコなどの鳥類やポニーと触れ合う機会を持つ。

・7月

園外保育にて水族館へ行き、海の生き物を知り、より一層の深い学びへと向かう。

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

・図鑑 ・虫眼鏡 ・虫網 ・飼育ケース ・えさ

○「移動動物園」の実施 ふれあいやえさやりができるようコーナーを分ける

○ビオトープとの違いや水族館にて海の生き物、川などに住む淡水魚を知る

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

・ビオトープ周辺領域や戸外活動を通して、虫を観察し、触れる。その際、時間をかけて観察できるよう虫眼鏡に虫を捕獲する。

・子どもたちのつぶやきを聴きながら、園で飼育することができるよう飼育ケースなどを準備し、飼育する際にはどんなえさが必要なのか、図鑑などで調べていく。

・飼育するものによって変態していく様子を観察する（カブトムシ）

・身近な生き物との関わりが醸成することによって、様々な生き物がいることに気づく。その中から小動物に興味関心を抱き、ふれあいやえさやりを通じて、動物ごとの特性（大きさやえさの違い、鳴き声など）を体験を通して知っていく。

・園内ビオトープや水槽で水の中の生き物（淡水魚）に興味を持ち、関心を深めてきたところで、海の生き物を見る機会を設け、関心を広げていく。

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

身近な自然（ビオトープ周辺領域）の中で出会う虫（ヤゴ、ダンゴムシ、テントウムシ、バッタ、カマキリ等）については、どこに多く生息しているのかを把握し、得意げに下級児に教え、虫探しを楽しむ姿が見られた。幼少のころから園庭探索をしていることで、2歳児頃から掌に集める姿がよく見られるようになる。

3歳児に頃になると、「持って帰りたい」との声が聞かれ始め、保育室内で飼育ケースに入れて観察する姿が見られ始めた。

身近な生き物との関わりが醸成すると様々な生き物がいることに気づき、小動物と触れ合う機会を『移動動物園』として設ける。

・ポニーなどの背中に乗ることに恐怖心を持つこの姿はほぼ見られないが、鳥類を恐れる児の姿が見られていた。羽を広げたり、鳴き声、予測できない動きをすることに驚くとともに、それが「怖い」という言葉で言い表す子もいる。仕切りを一枚隔てることで、近距離でも餌やりをしたり、観察することができる子もいた。

・保育室内に図鑑を準備しておくことで、様々な生き物に興味をもち、図鑑を広げて興味を深める姿が見られた。写真でわかりやすいこともあってか、自身で絵本を楽しむ際には、物語絵本より、図鑑を好んで広げる姿が多く見られた。図鑑を広げながら指差しをし、友だちと「どれが好き？」や「〇〇見つけた」などと会話を楽しむ姿が見られていた。

・生き物への興味が深まってきたところで、園内全体で学びを伝えることの出来る5歳児を対象に水族館へ園外保育を実施。水族館の生物ごとに最適な環境を見たり、触れたりする中で、ビオトープとの違いや発見したことを友だちや保育者に興奮気味に知らせる姿が見られた。



5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

身近な自然（ビオトープ周辺領域）では、水生昆虫、バッタ、カマキリ等多くの虫たちと出会うことができる。園庭探索を幼少期より多く行ってきたこともあり、気の合う友だちと様々な虫探しを楽しむ姿が多くみられる。出会った虫とのその後の関わり方が年齢ごとに異なり、年齢が上がるとともに、飼育してより身近に感じながら観察したいという思いが高まってくる様子が伺えた。飼育ケースに入れた後、生物の飼育環境を整えていこうと図鑑で調べたり、進んで世話をする子の姿が見られた。低年齢児は虫に興味を持ち、探すことや集めることに関心が向いているが、徐々に生き物自体への関心を深め、探究心が高まっていくことが分かった。

移動動物園でウサギやモルモットなどの動物と触れ合う際には、初めて動物と触れ合う子にとっては、期待と怖さが入り混じった様子が見られていた。しかし、友だちや保育者が触れ合う姿を見て、徐々に恐怖心が和らぎ、自ら手を伸ばす姿が見られ始める。絵本や図鑑から動物の存在を知っていても、触れ合う環境によって、子どもたちがその生き物に感じる思いに差が出てくることを実感した。保育者の関わり方や、触れ合い方を改めて丁寧に行っていきたい。

様々な生き物と触れ合い、関心を深めてきた年長児と共に、興味の幅を広げられるよう水族館訪問を実施した。園庭環境との違いや図鑑と比べながら、実際の大きさや動きに終始関心を寄せていた。自分が発見したことや経験したことを友だちと共有し、知識を得る喜びへと繋げている様子も伺え、実体験の大切さを感じた。

今回、通年に渡りビオトープ周辺領域における身近な生き物との触れ合いと、そこから派生する移動動物園や水族館訪問などの機会から、子どもたちの興味関心に合わせて探究できる環境構成が工夫できたと思う。今後もフィールドワークを取り入れながら、より一層探究できるよう整えていきたい。